

---

# ワンモアチャンス

ぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワンモアチャンス

### 【Nコード】

N1011T

### 【作者名】

ぐみ

### 【あらすじ】

高校卒業をまじかに控える女子高生、相沢優美。彼女は平凡なまま何事もなく高校生活が終わる事に不満と後悔を感じていた。

そんな時彼女にかつてない試練、そして思いがけず新たなチャンスが舞い降りる！

彼女は今度こそ本当の自分、そして大切な物を見つけられるのだろうか！？

## ワンモアチャンスー序章ー

「起きろ相沢っ！！」私は後ろから担任に頭を叩かれた。もう今週に入ってからとはまともに授業を聞いてない。私の名前は相沢優美、卒業を二週間後に控える高校三年生だ。既に地元の大学には推薦で受かっている。何も今更授業なんて・・・そんな思いから最近勉強には熱が入らない。いや熱が入らないのは勉強だけではないかもしれないが・・・

「優美、最近寝過ぎじゃーん！？」「クラスメートが休み時間に近寄ってきた。

彼女は川上美穂、私とは高校の三年間ずっと同じクラスだった。特に仲が良い訳ではないが、彼女は誰にでも気さくに話しかけてくる。

「まあ大学受かってるし、テンション上がらないんだよね」私は軽く答える。美穂は「凄いよね優美、青谷学園なんてさあ！なかなか入れないよ。」とにこやかに褒めてきた。

大体同級生や先生、親戚の人達もそういう。しかし私にとってはそれは褒め言葉にはならない、むしろ何故かイライラする。

放課後私と友達の須永綾は一緒に下校している。もうこんな風に歩くのもあと数日か。そんな事を思いながら私は歩を進める。隣で綾がしゃべり続けている。「ねえ優美はさー大学入ったら何のバイトする？私は教習所に行くお金ためたいから・・・って聞いてよ！！」その時私は反対から自転車を通り過ぎた女の子に目がいっていた。その女の子は私が落ちた地元の進学校の制服を着ている。

「ねえ、まだ未練あるの？」

綾が問い掛ける。

「まさかあー、あれから三年経つんだもんいまさら・・・」私は苦笑いしながらそう答えた。ただ視線はやはりその制服に向いていた。

自分でも理解できない、私自信確かに高校受験には失敗したしその時のショックは今も忘れない。ただ私の通った私立神田南学園で過ごした三年間は楽しかった。友達もいたし成績は学年でもかなり上位だったし学校行事も盛り上がった。何もこれ以上望む事なんてない。それでもここ最近ずつと心が曇っていた、なんだか余りにもあつけないのだ。特に部活に熱中した訳ではないし（とゆうか入ってなかった）映画や本のように激しい恋をしてもいない、大きな事件や冒険なんて起きなかった。子供の頃私はよく漫画本を読んだ、その主人公は大抵高校生くらいの子でとてつもない体験をしたり世界を動かすような事をしたからか、いつか高校生になると自分にも凄いストーリーが起きる事を期待していた。それも昔の話。私は来月には大学生だしその先は就職、いずれは結婚し出産、そんな人生が送れば十分幸せ。私は家に帰りベッドに寝そべった。コンコンとドアを叩く音がする。

「おねーちゃん、入っていい？」声の主は私の妹の相沢優香、小学六年生だ。4月には中学に上がるというのに童顔で小柄、はたから見たら三、四年生にしか見えないだろう。「なーに！？なんか用？」せっかくウトウトしていた私は不機嫌に返事をした。優香

は小さな包みを私にくれた。それをビリビリと破くとそこには羊のストラップが入っていた。

「おねーちゃん今日誕生日でしょ？ヒツジ好きだし気に入ると思うて・・・」

そう、今日は2月11日私の18歳の誕生日だった。決して忘れていた訳ではないのだが、子供の頃のように手放しでは喜べないというのが正直な気持ちだった。なんだか自分がもう若くないような気になってきたからだ。とは言ってもプレゼントを貰えば当然悪い気はしない。

「ありがとう、これ可愛いよ。」私は少し照れながら妹にいった。さっきはせっかく誕生日プレゼントを持ってきてくれたのに態度が悪かった事を申し訳なく思った。

「うん気に入ってくれてよかった！それとさーちょっと頼みがあるんだけど・・・いい？」優香が尋ねる。まあ大した事じゃないだろう、いつも通り宿題を手伝えとか言うのだろう。この子ときたら大の勉強嫌いだし、提出物の半分も持っていきやしない。

「なに？また算数のドリルでしょ？」もはや聞くまでもないと思った。

「えっ！？今回は違うよ！明後日の授業参観にきてほしくて・・・」

「え・・・？もう卒業だってゆうのに授業参観とかあるの！？」本気で驚いたが、どうやら小学校生活の終わりに親に手紙を書き渡すらしい。私の時もそんな事があった、ただし家に持って帰って渡したと思う。それに母はいけならしい。私達には父がいない、もう物心ついた頃からだ。母は夜までパートで働いている。いつも学校から帰ってくると私と妹はふたりつきりだ。

「お母さんに仕事休むように言いなよ！優香だって周りがみんなお母さんなのに私がいったら変でしょ？」

娘より店で他人に花を売ってる方が大事な訳はない、お母さんに頼めばきつと来てくれる。そう思った。だが優香はどうしても私に来て欲しいようだ。私達はいつも一緒だったから妹が母より私に懐くのは無理もない。

「わかったわかった。でもみんなの前で私の事ペラペラしゃべんないでよね！」

優香はしつこかったので私は渋々返事をした。明後日は土曜日なのに朝から学校なんて正直面倒だが・・・。

ようやく妹は部屋をでていった。私はベッドでゴロゴロしようとしたが調度母が帰ってきたのだ。いつもより帰りが早い、手には私の誕生日ケーキを持っていた。もう祝う歳でもない、だが来年の私は大学で一人暮らし、こんか風に家族で過ごすのは今回が最後かも知れない・・・。私は今夜は心に募る不安や憤りを隠し明るくしようと決めた。

「お帰り母さん！お疲れ様！」ニコツと母に微笑んだ。

次の日、私は学校にいつもより早くついてしまった。他にすることもないので普段はあまり使わない携帯をいじっていた。すると後ろから肩を軽く叩かれた。

「おはよう優美ちゃん！珍しくはやいじゃん！」確かに私はいつも出来るだけ寝ていたいタイプだからそういわれるのも仕方ない。

「おはようなつつん。早く来すぎちゃってヒマだったんだ」よかったよ。」

私はさっきまで持っていた携帯をバックにしまった。

彼女は私の隣に座り話し掛けてくる。

「ねえ優美ちゃん、明日あたし達カラオケ行くんだけど一緒にこない？高校最後に歌いまくろっ！ねっ！」カラオケは嫌いじゃない、だが明日と聞いてまず無理だと思った。妹の優香と約束しているのだから。

「ゴメン行きたいけど予定入ってるから・・・」私は妹の小学校に行かなければいけない事を説明した。

「えっつ優美ちゃんいないと盛り上がりがないよ！明日香や雪ちゃんも来るし、それにみんな卒業したらバラバラになっちゃうんだよ。」

こんな風にみんなで遊ぶ事なんて滅多になくなっちゃうよ！！」それは確かにと思った。彼女たちはそれぞれ専門学校や短大、就職とそれぞれの道に行く。きつとそれぞれの新しい場所でそれぞれの仲間ができるにちがいない。私の心は傾いてきた。

「だいたいさあ優美ちゃんはお母さんじゃないんだよ！なんでいつも妹に合わせてるの？」

その言葉を聞いて今まで妹の優香に振り回されてきた事が頭の中を巡った。家にはいつも幼い妹、私は姉として、一人で働き頑張る母になるべく苦勞をさせたくないと常に自分を抑えてきた事を思い出した。クラスメートが持っている可愛いらしい筆箱でさえ遠慮して

欲しいと言えなかったこともあった。もう少し自分の気持ちを優先させても罰は当たらないに決まってる。

「そうだね・・・私も明日一緒にいく。優香には今日話すね」

罪悪感はもちろんあったがそれ以上に母、そして妹に対しての反発があったのだろう。

「なんでっ！お姉ちゃん約束したじゃん！！」

帰宅後、予想通り優香はものすごい勢いで嘔み付いてきた。

「悪かったよ、でも私だって残り少ない友達と過ごす時間を大切にしたいの・・・」なんとか理解して貰いたかった。だが優香は続けた。

「そんな勝手だよっ！それにお姉ちゃんとその人達、そんな大切な親友と呼べるほどでもないじゃん！！」

ピキ・・・私の心にひびがはいった。凶星だった。この三年間で私には本当の親友なんていない、ただ授業の移動をしたり一緒にお昼を食べたり放課後一緒に下校したりする友達はいたが、本当に心が繋がっている友達なんていただろうか・・・？いや私自身、それ程強い絆で結ばれていないから、こそ卒業後はバラバラになりもう会うこともなくなるような気がしたのだ。妹には痛い所をつかれた。

「私が勝手？そんな事あんたに言われたくない！すぐ人を頼って自分じゃなんにもしないくせに！意見だけは通るとでも思ってるの！？」

感情が爆発した。妹も戸惑いを見せている。だが一度溢れだした言葉は止まらない私の口から次々と溢れ出てくる

「私はいつもいつも損な役ばかりっ！それもあんたが何の取り柄もない甘えて楽をすることしか考えてないようなダメな妹だから！！」優香の目に涙が写る。普段私はダメな取り柄のない妹など思っていない。この子は人から好かれ、素直で何より優しい心を持っている。私が怒りとゆう感情に支配されている。

「もうウンザリ！！妹なんて要らなかつた！！あんたさえいなければ高校受験だって上手くいった！！！！」

私は吐き捨てるように言った。妹にとってはとばっちり以外の何物でもないだろう。

「・・・うつつ、うえーんお姉ちゃんのばかー!!!」

彼女は顔を赤くして泣きながら部屋を飛び出していった・・・。

こんな事を言ってしまうなんて私は本当にバカだ・・・ときつとあと数時間経てば思ふのだろう。しかし今は感情が高ぶりコントロールできない。私は携帯を片手に自分の部屋に戻りベッドに潜りこんだ。今度こそ誰にも邪魔されず寝る!! 次の日の朝、私は早く起きて出掛けた。優香と顔を合わせるのは気まずいからだ。

みんなが来るまで一時間もあつたので私は近くのデパートで一人でフラフラしていた。ふと電気屋さんの近くを通ると、大きな液晶テレビでサッカー中継が流されていた。画面の中ではプレーをする選手にそれを応援する多くの人達。こんな大勢の人から注目されるのってどんな気分なのだろう・・・

私には想像もつかない、だって周りから飛び抜けるような特技や才能なんて持ち合わせていないし、特に美人でもなくスタイルが良いわけでもないから。とゆうか持っている人が一握りで私はその他大勢の内の一人っただけだろう。

ただ私には眩しかった。こんなに真剣に打ち込める何かがあつて。さてと、そろそろ待ち合わせの時間になるかな・・・

デパートを後にして駅へと向かった。

「こっちこっちー! 優美ーっ!」

改札の近くで美穂や綾が私を呼ぶ、フラフラする時間が少し長すぎてしまったようだ。

「ごつめーん! 家を出るのは早かったんだけど寄り道しちゃった。」  
みんなに謝った。

「大丈夫だよ。うちらだつてさつき来たばかりだし、電車の時間までまだ結構あるからー!」

確かに遅れたといっても数分だった。

「あれ? 優美、可愛いネックレスしてるじゃん。」



綾が私の首もとを指差してゆう。この前妹から貰った誕生日プレゼントだ。今日さっそく付けてきたのだ。

「これ優香からの誕プレなんだ！」

と私が答ると姉妹の仲が良いねと美穂達にもゆわれた。今喧嘩中だけどねと、返事をしそうになって辞めた。喧嘩の元が今日みんなと遊び行くからだと言明したら盛り下がるに決まってる。KYになってしまう。

私達は電車に乗り込んだ。

四人でプリクラを取り、雑貨屋さんを見て回ってから私達はイタリアン料理店に入った。

「遠藤君って愛美に告ったんだよ」

「マジで！？きつもー！自分の顔みろしー！」

盛り上がりつつあるようだが私は話に入れない、とゆうより私にとっては誰が誰に告るとか、振られるとかあまり興味がわかない。

「ねっ優美、遠藤のやつ高望みしすぎだよな？あんな顔でさ。」

急に話を振られた・・・

「そつだよ！愛美が相手にするわけないのにね！」

と私は話を合わせた。そしてその瞬間自分に嫌気がさした。何故私はすぐに人に合わせてしまうのだろうか？もつと自分の意思がはつきり言える人間に成りたいと何度思ったか・・・「あんた達だって人の事言えた顔？」なんて言ったらすつきりするだろうなあ！だけでも無理、クラスで嫌がらせをされている子がいると私はいつも止めよう、助けようと幾度と思った。だがその度胸がない・・・

結局いつも傍観者になってしまうのだ。

ふっ・・・と視線をずらすと店内の時計に目がいった、今12時30分だった。優香 達の授業は5時間目だから今いけば間に合うかも・・・

私はつぶやいた

「優香、どうしてるかな・・・？」

「まーた心配しなくて大丈夫だって！むしろみんなの前で発表する

のが避けられて喜んでるって！！ははは」

軽い調子で綾が言う。私にはみんなが遠く感じられた。同じクラスで一緒に過ごし、こうして遊ぶ事もあるとゆうのに私に対して親身になってくれるような子は一人もないからだ。昨日優香が言ったように表面上の付き合い、ただ一人が嫌で付き合い合っているようなクラスメート達。なのに何故たった一人の妹の約束を破ってまで私はここにいるんだろう・・・！やはり来るべきじゃなかった！私は決めた。

「ごめん！私やつぱり帰る！！」

みんな急にどうした、とゆうような目で私を見たが自分の分のお金を置いて私は店を出た。きっと今頃私の悪口を言ってるだろう。いつもそうだ、いない子の悪口を言い始めるのだ。私も例外じゃないだろう。でもそんな事どうでもいい、言いたいならゆわせとけっ！頭の中で流れる心の声は珍しく強気だった。

私は駅に向かい走った。こんなに真剣に走るなんて小学校の徒競走以来かもしれない。

信号が点滅している、もう赤に変わるのだ。大丈夫つ、まだ間に合う！

私は急いで横断歩道を渡った・・・いや正確に言つと渡れなかった。

「ブッブブー！！！！」

大きなクラクションが耳元でなった。

私の目に白いワゴンの車が写る。

はっ・・・！！

もはや避ける時間などなかった。次の瞬間には私は道路に横たわっていた。

「おいっ！大丈夫かっ！？」

「大変だー！！女の子がひかれたぞおっ！！！！」

周囲の人々が私の周りに集まってきたようだ。

視界がぼやける・・・これはただ事ではない・・・

痛い・・・怖い・・・嫌だ・・・いやだ・・・！！死にたくない・・・

・。

生まれて初めて本当の死の恐怖が私を襲う。人間いつかは死ぬとゆうが、そんなの気休めにもならない・・・とてつもなく怖い・・・どんなに味気ない人生でも生きていたい。「神様っ・・・！もう私贅沢ゆわれないからっ・・・高望みなんてしないよ・・・」

心から祈った・・・だが、視界はだんだん薄れていく、私を暗闇の世界へと誘うのだ・・・

そんな・・・母さん・・・優香・・・

## ― 出会い編 ― ? 目覚め

・・・・・・・・・・・・・・・・ん？

僅かに光が差し込んでいるのがわかる。

指をうごかしてみる・・・

ピクツと私の中指が反応した。

生きてる！私生きてる！

景色が鮮明としてきた。白い・・・これは、ああ天井だ。

私は病院に運ばれたんだ。そう確信した。よかった本当によかった  
神様は私を助けてくれたんだ・・・！

ああ本当にありがとうございます！

心から感謝した。

「未来っ！」

「父さんっ！母さん！未来が気がついたっ！！」

その時、ベッドの傍のイスに腰掛けていたらしい男の子、たぶん1  
5、6歳の子だろうか・・・？

が私に近寄ってきた。その表情からは彼が心から私の事を心配して  
いたのが伝わる。

・・・が、私は彼の事がわからない。

名前も顔もまるで知らない。

ただ茫然と見つめることしかできない。

そして中年の男性と女性も私に近づいてくる。男の人はメガネをか  
け、背の高い寡黙そうな男性、女性の方は丸顔で、穏やかそうな雰  
囲気の人だ。

「未来っ！っ本当によかったあ！！お母さん、もう心臓止まるかと思  
ったよっ！！」

泣きじゃくる女性。

えっ・・・みらい？

・・・お母さんって・・・？

状況がまるで理解できない。

「おいつ何とか言えよっ。大丈夫なのかよ？」

男の子が私に言う。

ぶっくらぼうだが私の事を気づかってくれてるようだ。

「えっと・・・あのよくわからないけどたぶん人違いじゃ・・・」

と言いかけてから私は口を詰むんだ、おかしい、なんだか私の声じやないみたい・・・こんなに高い声じゃ・・・

「ほらっココア入れたから飲んで落ち着け。」

男性が私にマグカップを差し出す。

「ありがとうございます」

それを受け取り口元に運ぼうとした。

「ーっ!!!!??」

ココアに反射し、おぼろげに顔が映ったのだ。しかしそこに見える顔は私ではない!!

言葉を失う・・・

頭の中が真っ白になった。

もう何もかも考えられない・・・

121

それから三日間は入院していた。

話から察するに、どうやら私？は学校の体育のマラソンの授業中に倒れ、一時は心臓が止まってしまったらしい。

おそらくクラスメートであろう彼女の友達が何人かお見舞いにきてくれたが、その誰ひとり私の知る子はいなかった。

今日は雪が降っている・・・

病室の窓から外を眺める。雪は昔から大好きだった。こんなに積もるなんて、ここ栃木県では珍しい。

。

窓に自分の姿が映る・・・。

いや自分なんてとても思えない。

小柄で丸顔に大きな目、ちょっと癖の入った栗色のショートカット

の女の子。

今中学3年生らしい。

こんな事になるなんて・・・

これからどうしたら・・・？

目が潤み涙が頬をつたう。

「コンッコンッ！」

病室のドアをノックする音が聞こえる。

急いで涙をふいた。

涙は見られたくない。

「未来ちゃん！

体は大丈夫？」

短髪で浅黒い肌の元気そうな女の子が病室に入ってきた。私？の通う中学の制服をきているのでおそらくクラスメートなのだろうが当然名前は知らない。

「あっ・・・うん。」曖昧な返事をしてしまった。

「本当にびっくりしたよ。救急車きた時はまだ心臓動いてなかったんだから！」

「AEDとかなんとかゆうやつ、使ってんの私初めてみたよ！あれめっちゃ痛そう！」

よくペラペラと喋る子だなあ、私はほとんど答えてもないのに。

「それで退院はいつ？」

「明日・・・だと思う。」

また気のない返事だ。

「よかったじゃん！来週からは学校来れるね！！受験も近いし頑張んなきゃね！」

えっ、私受験生なんだ。この前大学の受験が終わったばかりなのに。「あのー私どこの高校受けるんだっけ？」なんて間抜けな質問だろう。だが知らないのだから仕方ない。

「えーっ！何いつてるの！？一緒に芦岡女子高アシオカを受けるっていつも言ってるじゃん！！？」

びっくりだ！芦岡女子高といえば忘れもしない、私が三年前落ちてしまった高校じゃないか！

という事は私？、音羽オトウ未来は、かなり勉強が出来る子なのだろう。

「ねえ大丈夫？なんか様子おかしいよ」

「ちよつと頭がぼんやりしてて・・・」

苦しい言い訳だ。

「まだ体調良くないみたいだから私もう行くね？月曜からは学校来れるでしょ？ どうせ卒業式の練習ばつかでつまないけど。」

彼女はそう残して病室を後にした。結局名前は分からずじまいだった。

私はまた病室に一人になった。直に家族が来るだろう。もちろん私の本当の家族ではなく、音羽未来ちゃんの家族だが。

彼女は家族に恵まれている。凄く大事にされ育った事が伝わる。

今頃お母さんと妹の優香はどうしているだろう？

家に行きたい。二人に会いたい。私がこうして未来ちゃんの体に入ってしまったのだから、彼女が私になっっているのだろうか？それではまるで昔あったドラマのようだ。

どちらにしても確かめに行きたくて仕方ない！いつそ今から・・・

いや私が急に病院から抜け出したらみんなが心配する。

でも明日までは待てない！！

私は棚の上にあった黒いジャンバーを羽織った。

さあ出掛けよう、そう思った矢先に未来ちゃんの家族が訪ねてきた。

「どうしたの？そんな着込んで・・・」

彼女の母に聞かれる。やむを得ない、やはり明日だ。

次の日、私は退院して家に戻った。音羽家はまだ新しい一軒家で、庭は芝生で広く、レオナルドという大きな白い犬を飼っている。

しかし部屋で寝転がっても他人の家としか思えず居心地がわるい。

「未来、お母さんお買い物行くけど一緒にくる？」

部屋に入ってきたお母さんに誘われる。

行く訳はない。私はさっきからずっと彼女が出ていくのを待っていたのだから。彼女は専業主婦のようだ。

私は断ったので一人で出掛けた。それを待っていた私も少ししてから家を離れた。

しばらく歩き駅から電車に乗る。

心臓が高鳴る。

ドクンドクン！

こんなに大きくなるなんて、体育館で全校生徒の前で作文の発表をした時より、この前のセンター試験の時よりはるかに上だ。

足が震える。電車の中でも座ってなどいられない！

息も上がる。

電車から降りた、あと数分だ・・・

凄く不安になる。

あの角を曲がった所だ・・・！！

「・・・そんな・・・まさか・・・」

私は目を疑った。家には制服をきた人々が集まっている。

そして黒い車・・・もはや嫌でも想像がつく、ついてしまう。ふらふらの足どりで私は家に近づき窓から中を覗く・・・

。母だっ！隣に妹もいる・・・



母はまるで生気を失っている！まるで死の淵にいる病人。こんな母を見たことなどない！

そして妹……

もはや涙はかれはてたろうに、なおも泣きつづけている。

その時、近所のおばさんが数人で通り過ぎる。

「相沢さんちはさくホント気の毒だよっ！夫を若くして亡くしてから、女手ひとつで子供を育てたつてのに、娘さんにまで先立たれちゃね！

あたしだつたらもう生きていけないよ。」

その通りだ……

母にとって私と優香は生き甲斐だ、何よりも大切にしてきた。その為は何年もお花屋さんと工場での仕事を掛け持ちしてまで頑張ってきた。

それなのに何故、何故こんな仕打ちを！

ダメだっ！あんな様子の二人を見てなどいられない！

私は逃げるように家から離れた。本音は今すぐ二人の元へ行き、私はここだと伝えたい！だがそんな事を誰が信じる！？

涙が溢れる。

人前では滅多に涙を見せない私が、大勢の人のいる駅で声をあげ泣き叫ぶ。

もはや人の目など気にする余裕なんてない！

「お嬢ちゃん大丈夫かい？」

おばあちゃんが声をかけてくれたみたいだが、今の私の耳には入るわけもない。

「うわああああ！うわああ！！！！」

まるで赤ちゃんのように泣き続けた。プラットフォームには私の泣き声が響きわたる。

今にも倒れそうだ……このまま倒れてしまいたい。

「ちょっと未来どうしたのっ!？」

そんな声など無視をし、家につくなり私は部屋の鍵を閉め倒れこむようにベッドに横たわる・・・

「未来っ!未来!!」

彼女の母がドアの向こうから呼び続ける。

辞めてっ!その名前で呼ばないでっ!!

私は耳を抑える。

覚めてっ覚めて・・・もうこの悪夢からっ!!!!

## ？決意

あの日、私が、私でなくなった日から三日が過ぎた。今は音羽未来が通っていた中学、大谷西中学に行っている。まだ夢の中にいるみたいな日々だ。これまでの学校生活でわかった事が三つある。

まず未来ちゃんはクラス内ではおとなしくあまり目立たない女の子だったという事、次に運動神経はさしてよくない・・・むしろかつての私の方が体が俊敏に動いた気がする事。

そして三つ目、3月9日に公立試験を控える受験生だという事。しかも私にとって憧れの芦岡女子高だ。三年前私がどれ程あの高校に行きたかったか。

だが今はこの状況に滅入っている。今までの環境ががらつと変わり、家族を失い4月から始まるはずだった新生活も失った。とても受験の事など考えられない。朝がくるたびに元の私に戻ってないかと願っている。その度に落ち込んでいる。

今もこうして休み時間にひとりぼっちで窓際の席から外を眺めている。

私を失い絶望する母の顔を思い出す、胸が苦しい、いつそあの時あのまま死んでしまっていれば何も知らずにいられたのに。こんな辛い思いをしてまで他人の体で生きている意味などあるだろうか・・・

？娘と姉を失ったと思っっている家族に、私を本当の娘だと信じている未来ちゃんの家族。

この窓から飛び降りたら死ねるだろうか？私の頭にふとそんな考えが過ぎった。しかしそんな事ありえない、なぜなら私にそんな度胸はない。いくら人の体とはいえ、落ちたら痛いのは私だ。痛みなどなく眠るように死ねるならそうしたい。

「未来ちゃんっ！」

後ろから声をかけられた。その子はいづい先日病院にお見舞いに来てくれた女の子。名前は確か東野 茜

ひがしのあかね

ちゃん。

「ちよつとさゝここ数日未来ちゃん暗いよ！くらすぎっ！受験の事で頭がいっぱいなのは分かるけど、そんないつも下向いてると幸運が逃げちゃうよ！？」

彼女は凄く明るい子だ。クラスでもムードメーカーだし、まるで悩みなどないように見える。

だいたい私はとくに幸運なんて物から見放されている。

そうとしか思えない。この一週間で人生の全てを失っているのだから。

「ねっ今日学校終わったら竜泉神社に行かない？合格祈願しようよ。あたし達が一緒に芦岡女子高に受かるように！」

竜泉神社とはこちら辺では有名な神社だ。

「いやゝ私はいいよ。御利益とかあんまり信じてないし」  
私はすぐさま断った。

「でも噂じゃ結構運氣上がるらしいよ！」

茜ちゃんはそういうが実際私はそこに三年前に初詣で合格祈願をして落ちているわけだ・・・。

まあそれはともかく、私は今受験どころではない。

「たまには気分転換しなくちゃ！その方が勉強も頭に入るよ！」

結局彼女と一緒に行く事になってしまった。私は本当に押しに弱い。なんとゆうか断りきれないのだ。

学校が終わり私と茜ちゃんは自転車で神社へと向かう。

私は特にしゃべらないので、茜ちゃんが私に話しかけてくる「あたし芦岡でも絶対バスケット部に入るんだっ！目指せ全国って感じ。ってちよつと突っ込んでよゝそれはないってさー！あたしが痛いじゃーん」

茜ちゃんはバスケット部だったようだ。体は小さいし意外だ。小学生の

時から始め、市の代表にも選ばれたらしいからきつと上手いのだろう。

神社についた。結構混んでいるみたいだ。  
受験生がたくさん神頼みにきているわけだ。私は人混みは苦手なのだがここまで来てしまった以上は仕方ない。

それに屋台が出ている、私の大好きなフライドポテトだ。

「茜ちゃんポテト買わない？」

早速誘った。

「いいねっ！かおっ！」

彼女も乗り気だ。

「それと、ちゃん付けしなくていいからさっ！」  
と続けた。

フライドポテトは奢ってあげた。茜ちゃんは遠慮していたが中学生の子に払わせるのは気が引けたのだ。

久しぶりに嫌な事を忘れられた。体は変わっても好物は同じ。

それに茜ちゃんは凄く感じの良い子だ。

この子と同じ学校に通うのは悪くないかもしれない。

ベンチに座りながら二人していると茜ちゃんが口を開いた。

「あたし、未来ちゃんが倒れた時凄く怖かった。今まで身近で亡くなった人いないから、人の死とか遠く感じてたから……もちろん誰にだって命には終わりがあるって知ってるけど、でも……普段そんな事意識してなくて……ってなんか上手く言えないなあ！まあつまり一日をもっと大切にしたいと思ったの。」

苦笑いしながらそう締めた。

彼女の気持ちはよく分かった。

私も高校二年の秋に祖父を亡くすまで人の死など別世界の事のように思っていた。テレビで殺人や事故があっても、それを身近に感じた事がないのだ。

祖父を亡くした時始めて人の命の儚さを噛み締めた。

本当なら私はこの世界に存在しない人間なのだ。こんな風に誰かと話し、悲しみ、食べ物の味を感じる事など永遠にないハズだったのだ。ポロポロと涙がこぼれる・・・

「えっ未来ちゃんどうしたのっ!？」

なんか気に障った？

辛いこと思いださせちゃった!？

ゴメン!ごめんねっ!！」

茜ちゃんは突然の事で慌てている。

そうじゃなく、私はたとえ自分の体ではなくても、この世界に留まれた事に始めて感謝の気持ちを抱いたのだ。自分の魂が消え、もう何も感じたり、見たりできない、それを想像した。喜びも悲しみも悩みも痛みさえない・・・。

そしたら今私の目に映る景色が眩しく輝いて見えた。

「もう帰ろうか未来ちゃん？」

心配そうに私の顔を覗き込む茜ちゃん。

私は黙って首を振り、涙を拭いて言った。 「急に泣いてごめんね。

合格祈願しようよ!」

私はこの時に心の中で誓った。神様の気まぐれで与えられたもう一つの人生、精一杯生きると、いつかあの世で未来ちゃんにあった時に恥ずかしくないように。

## ? 合格発表

あれから1ヶ月が過ぎ、今日は合格発表の日。私はついこの前大学を受験した高校生だし、先週のテストでも手応えは十二分にあった。合格はほぼ確信している。

だがそれでも一度は落ちていただけあって数日前から落ち着かない。一緒に受験した茜ちゃんとは別々で見に行く、片方が落ちていたら気まずいと思った。

「お母さん達は別にいいからね！未来が例え落ちてたって！」

朝出発する前に玄関でおばさんが声をかけてくれた。

「ありがと。受かってたら9時までには電話するよ」

私はそう言いながらおばさんに持たされた携帯を見せた。今の私はまだ中学生だから自分の携帯を持っていないのだ。

芦岡女子高の校門をくぐった時には更にドキドキは増してきた。

「きつと受かってる。あれで落ちてたら合格できる人なんていない」頭ではそう言い聞かさせているが鼓動は激しくなる。

掲示板の前に近づくと、そこは歓喜と落胆する受験生でうめつくされている。

420・・・私の番号はとくに頭に刻まれている。それでももう一度受験票に目を移し確認する。  
よしっ

覚悟を決める

掲示板に張り付けられている合格発表の番号をさがす。

3 2 8    3 3 3    3 3 5    . . .  
. . . 4 1 1    4 1 3    4 1 6    . . 4 1 8

420!!

「あっ！あつた！！やったやったあっ！！！！！」  
喜びが爆発した。

と、その時横から肩を叩かれた、茜ちゃんだっ！

「おめでと未来ちゃん！

私も受かった！！」

茜ちゃんも満面の笑顔だ。

「あかね、よかったよ！ちょー緊張したわ、ってゆか先に来て私が受かってるの知ってたなら先に教えてくれてもいいのに！あたし緊張しすぎて心臓止まるかと思ったよ！！」

「ははは・・・って未来ちゃん、それ冗談にならないよー！もうこの前みたいな事にはならないでっ！大体さあ私が教えちゃったらつまらないでしょ！？」

私達はしばらく喜びを分かち合った。

少したつておばさん達の事を思い出した。

そうだっ今頃私の事を心配してるだろうな。

家で待つおばさん、おじさんに電話をした。二人ともまるで自分の事のように喜んでくれた。

「今日はケーキ買ってお祝いだね！何がいい？デコレーション？それともチョコレート？」

「いいやせっかくだしどっちも買っうね！」

おばさんもすっかりテンションが上がっている。

「高校生になつてもよろしくね未来ちゃん！」

「うんっこちらこそよろしく！」

私達は笑顔のまま解散した。茜も早く帰って家族に報告したいのだろっ。

・・・家族。



そつだこんなにも嬉しい気持ちなのに、もうそれを母や妹と分かち合う事ができないのだ・・・

私は三年前の今日、合格する事ができず心の底から落胆した。もしあの時私が受かっていたら、おばさん達のように母も喜んでくれただろうに・・・。

今日何か二人にしてあげたかつた。

でも何も思いつかない・・・

このままおばさん達の待つ家に帰ろうか・・・と思つたがせめて顔だけでも見に行こうと決めた。

ここ一ヶ月、一度も見えていないのだから。

そうはいつでも今の私は完全に他人なのだからそう簡単に話ができるとは思えない。

優香は小学校を卒業して今は春休みだろうが、家の中に入る口実が見つかからない。

だが昼間花屋のパートをしている母に会うことは簡単だ。私がお客として行けばいいだけの事なのだから。

そう考え母の勤めるお花屋さん

“グリーンヴ”に入った。

そこには確かに母がいた。

しかし最後に見た時よりずいぶんとやつれている。

その顔はこけていていて、疲れも感じさせる。

こんなに近くににいるのに母に何も言葉をかけられない。

もどかしい・・・。先程までの私は喜びでいっぱいだったのに、変わり果てた母を見てそんな感情は消し飛んでしまった・・・。

私はピンクのコスモスの束を買つた。

「ありがとうございます。1480円のお買い上げになります」それが約一月ぶりに聞いた母の声だ。

「あのっ・・・！」

つい声をかけようとしてしまった。

でもなんて言葉をかけたらいいいのか、次の言葉がでてこない。

「どうしたのお姉ちゃん？」

母が私を怪訝そうな顔で見ている。

「あっ・・・いえ何でもありませんっ！すみません！」

私は慌ててそういい、包んでもらったお花を受け取った。

そしてそそくさとお店を出た。

すっかり気が重くなってしまった。

元々母はスレンダーな体型だがあんなに痩せてて体は大丈夫なのか？  
優香はどうしたのだろうか？

不安が広がる・・・。

と、その時携帯がなった！

この携帯はおばさんの物だから、おばさんの好きなサザンの歌が流れる。

「もしもし。」

私は電話にでた。

「ちよつと未来今何してるの？お昼みんなで食べにいくんだから早く帰ってきてよ！」

おばさんからだ。そういえば、お昼にみんなでお寿司を食べに行くと言ってた。

「ごっごめんっ！あと30分くらい待ってて！先に行ってもいいよ、後で自転車で行くから」

おばさんは不満げだ。そりゃそうだろう、今日の主役は私なのだから。おばさんはまだぶつぶつ言ってたが私は携帯を切った。

どうしても寄りたい場所があるのだ。

そこは一ヶ月間、近づくに近づけなかった場所・・・私の、相沢優

美としてのお墓。

これから始まる新たな人生に向けてここでケジメをつけたかった。いつまでも避けてはいられない、受け止めなくては。

私のお墓はお父さん、おじいちゃんと一緒にだから何度も足を運んだ場所にある。

かつての私の家から15分ほど、周りは竹やぶと小川が流れる静かな所。

ここに私の本当の体が眠っている。

相沢家……。

ここだ、父や祖父も眠るこの場所だ。

凄く複雑な気分だ。こうして自分のお墓を見下ろすなんて。

視線をそらすとそこには多くのお供え物と綺麗なお花がおいてある。きっと母達はしょっちゅうここに来ているのだろう。

「あつ……これはっ……」

つい口にしてしまった。

そこにあつたのは私が誕生日に優香から貰った羊のペンダントだ。

私が事故にあつた日も着けていた。だがペンダントはほとんど傷もなく多少汚れているだけだった。

私はそれを手にとり暫く眺めていた。そしてポケットからハンカチを取り出し軽く拭き、首に着けた。お墓にある物を取るのは多少気兼ねしたが、これは自分で持っていたかったのだ。

妹との絆、

そして自分が相沢優美である事のあかし。

私はこれから音羽未来としての人生を歩む、しかし相沢優美である事も忘れる訳にはいかない！

首に着けたペンダントを強く握り私は心から誓った。

私は二人分の人生を生きるんだ、精一杯、後悔のないように！

お父さん、まだ私はそっちに行かない。だから見守って……

私を。お母さんと優香のことも・・・。

春の訪れを感じさせる太陽が眩かった。

## ?入学

その日は6時前に目が覚めてしまった。そう、今日は芦岡女子高の入学式だ。

つい最近まで18だった私が15歳の女の子と一緒に高校に上がるなんて不思議な感じだ。たしかに3つ年下なだけ、なんて言ってしまえばそれまでだが、若い時の3つ差はでかいのだ。

そりゃあ70 80ともなればあまり気にもしないだろうが私達は十代だから上手く打ち解けるか不安だ。

それで色々考えていたら熟睡できず、こんな朝早くに髪の設定をしているのだ。それに今の髪はくせっ毛でなかなか決まらないものもある。

今まではサラサラした手触りだったのに、未来としての髪の手触りはどうにもクシャクシャしてしまい不便に思う。このくせっ毛はおばさんからの遺伝なのだ。

春休み中にストパーでもかけた方がよかったかも知れない！

などど少し後悔をした。

芦岡女子高まで電車で20分くらいかかる。初日から遅刻して変に注目浴びたくないと思い、私は一時間前には家を出た。紺色の新品の制服。白いスカーフに、憧れの四つ葉のモチーフが後ろ肩の部分についている。

制服を着ると、私立神田南学園での思い出が消え、本当に今日始めて高校生になる気がした。

不安と期待が入り混じったような初々しい気分なのだ。それにおばさんから自分専用の新しい携帯も与えてもらった。まだ家族の数人のアドレスしか入ってないが、これから友達ができればどんどん増えるだろう。しかし、まずクラスが気になる。何しろ茜しか友達が

いない。

新しい環境に馴染むまでが大変なのだ。少なくとも数日は友達で  
きずクラス移動、休み時間、そしてお昼と一人で過ごさなくてはな  
らなくなる。茜さえクラスが一緒ならずいぶんと気が楽になる。

そう思っていたのだ、が残念ながら私は二組で彼女は三組になっ  
てしまった……

「未来ちゃん！クラス別々になっちゃったね！！がっかりだよ。」  
茜はそう言っているが明るく元気な彼女の性格を考えたら、どのク  
ラスに入ろうと上手に打ち解けるだろう。

「まあクラス隣だし休み時間には遊びにいくよ！」と言ってくれ  
ているが一週間もすれば新しい友達として私の所には来てくれない  
ような気がして不安だった。

私たちはクラスのある三階に向かうため階段を上っている。する  
と茜が突然声をあげた。

「あつ！！あの子……！」茜の目線の先にいたのは、黒髪のサ  
ラサラした髪の毛が肩まであり、肌は白く

上品で整った顔立ちの少女だ。その少女は廊下で先生と話をしてい  
る最中だ。

「綺麗な子だけど……茜の友達？」

「ううん。友達って訳じゃないんだけど、部活で試合した事があつ  
て、彼女のチームは全国大会の常連だったし、個人としても県代表  
とかにも毎回選ばれているから、こちら辺でバスケやってた人達の  
間じゃかなり有名な人なんだ……」

茜のテンションがいつも以上に高い。

「へえーそりゃ凄いつ！あの顔でバスケも上手いなんて」

天は彼女に二物を与えたとは思えない。

「よかったじゃん。そんな上手い子がいるなら強いチームになるか

もよ？」

茜に言った。茜自身はかなりの実力者なのに中学ではチームメイトに恵まれたとは到底言えず、三年間で二回戦に上がったことが一回だけとゆう。

それから私達は別れ、別々のクラスに入ってしまった。

私の席は前から3番目の廊下側だ。名前順で、音羽はおから始まるのだから前には数人しかいない。

周りには顔見知りなど一人もいない。凄く心細い。話す友達もいないので携帯をいじる。

とはいってもメールを打つ相手さえいないのだが……

「ガラッ」

クラスの前のドアが開いた。

先生かな、と思い一度顔を上げた。

入ってきたのは170はあるだろう長身に、カールのはいった茶髪に色黒の女の子だ。きつそうな目つきで私の苦手なタイプと真ん中といったところだ。

「うわっ席近かったらどうしよう！」

私の心は真っ先にその心配をしていた。

しかし私の心配は杞憂に終わる。

彼女は窓際の方に歩いていったからだ。

よかったあ！心底そう思った。私は昔から不良っぽく見える子に苦手意識がある。なるべくなら関わりたくないというのが本音だ。

次にドアが開いた時は本当に担任の先生だった。40半ばと思われ

る男性だ。

先生が入ってくるとみんなが席に着き、少ししてから先生の自己紹介が始まった。

先生の名前は橋本英一とゆうらしい。

なんとも真面目そうな人だ。国語の授業も受け持つらしいが、おそらく授業は退屈なものになる事は間違いないだろう。

ホームルームが終わると私たちは廊下に並び体育館へと向かう。入学式が始まるからだ。

芦岡女子の体育館は思ってたより狭く感じた。おそらく私がいままで私立の学校に通っていたからだろう。

私立神田南学園には全クラス冷暖房完備に加え、体育館には映画館並のスクリーンもあった。それに比べると公立の芦岡女子は設備面では大分見劣りする。

私は式の間ほとんど上の空だったし、周りのほとんどの女の子もぼうつとしている。

校長先生の話を目に聞くなんて子は昔も今も滅多にいやしない。この体育館にいる9割以上の子が早くこの退屈な話が終わる事を望んでいるだろう。



「続いては新入生代表、風間時音さん！」

司会の言葉にハッとした私は教壇に視線を戻した。

先程茜が騒いでいた女の子だ。

新入生代表に選ばれていた。

さつき廊下で先生と話をしていたのは、この事を打ち合わせしていたのだろうか？

私の近くの席に座っている何人かのコソコソ話が聞こえる。

「相変わらず凄いね時音ちゃん。確か代表挨拶って入試の結果の最優秀者がやるんだよね？」

「マジで！？やばっ！」

最優秀者ねえ……。

頭脳は大学生の私としてはまったく立場ないなあ〜と心の中で苦笑した。

試験の出来に関しては私だって相当の自信があったというのに。

それにしても顔は良い、運動神経もよくて、その上頭もいいなんてまったく天は二物を与えないなんてどこの誰の言葉だか。現に彼女は何物と持たされているじゃないか。

気が付くとまた私の悪い癖が出ている、誰かと自分をすぐに比べて、自分は自分は・・・と、卑屈になってしまう事。

大体比べる相手が悪い。

私は頭の中に溢れてくるネガティブな思考を追いやる。

横を見るとちょうど三組の席に腰かけている茜と目があった。茜も風間さんが新入生代表に選ばれていた事に驚いているようだ。

そうこうして式は終わった。

私たちは再びクラスに戻る。

体育館通路に桜の花びらが落ちてきている。

ここで高校生活はどのようなものだろう。

？入部！？

朝早く、まだ6時前だが私は洗面台の前にいる。なぜならばヘアアイロンを使って髪を真っ直ぐにしようと努力しているからだ。

高校生活の2日目、なんとか周りと打ち解けたい。そのためには髪型にも気をくばらなければと私は妙に張り切っていた。

たかが髪、されど髪、女子にとっては重要だ。

以前私のクラスに天然パーマが強い女の子がいた。彼女のあだ名はボンバーマンだった。私は間違ってもそんなあだ名を付けられたくない！

そのためには毎日2、30分の早起きは欠かせない。

学校に着いて私は自分のクラスに入り、席に座った。

周りの子達は同じ中学とかでグループを作っていたが、私はなかなか自分から話をかける事ができない。

ぽつんとクラスにいるのは結構きつい、私は隣のクラスの茜に会いに行った。

3組のクラスを覗くと茜は既にグループの輪に入っていた。周りの女の子達と楽しそうに笑っている。

私は余計に淋しくなった。しかしクラスが別ればこうなる事は分かっていた。

茜には人から好かれる雰囲気がある、のほほんとしながら、気がつくくと周りに人が集まる。

邪魔しちゃう悪いと思った私はそのまま離れようとした、が茜は私

に気がついた。

「あつ未来ちゃん！ちよつとまってる！」  
そう言つて私を追いかけてきてくれた。

「未来ちゃん来てるなら声かけてよ」

「いや・・・茜楽しそうだったし、特に用があつた訳でもないから」  
茜は私がクラスに馴染んでいない事を察した。

「ねえ私さあゝ今日の放課後、バスケ部の見学にいくつもりなんだけど・・・一緒に行かない？」

と誘つてくれた。私に氣を使つてくれているのだろう。

「あゝでも私はバスケには興味ないし・・・」

申し訳ないが遠回しに断ろうと思つた。なにせ私は体育の時間でさえ、自分にボールがくると3秒以内に誰かにすぐパスをしてしまう程自信がない。わざわざ部活に入つてまでやるなど問題外、論外、ありえない！

とは思つてゐるがせつかく私に氣を遣つてゐるとゆうのにあまりハツキリと断るのは悪い氣がしたので、それとなく言葉を濁した。

「運動部だと、ほら上下関係がきつそうだし、ちよつとねえ」

まあ確かに部活を入れれば自然と周りに打ち解けるだろうし、クラス内でも仲良くなれる子ができるだろう。だがやはり運動部は無理だ、この体では元々の自分より身長は低い、力も弱い、持久力もないのだから。

「上下関係？それなら全然問題ないよ！大丈夫！

だってここ正しくは部活じゃなくて同好会なんだよ！

芦岡女子バスケ同好会！！」

えゝ！私の友達の何人かは芦岡女子に入つていたけどバスケ部あつたよ！

実際に入つていた子もいたし。

と声に出さずに突つ込みをいれた。

驚く私を見て茜は話を続ける。

「私もさ普通にあると思ってたよ！だってバスケットってメジャーだしね。」

でも昨日の放課後に先生に聞いたの、バスケットは今日練習してますか？

って、そしたらさ、今は部じゃなくて同好会になっちゃったってゆうから。」

「えーバスケットのない学校なんてあるんだ・・・」

私は呟いた。「ねー！私もびっくり！なんか先生が言うにはここ何年間で、アイスホッケー部、サッカー部、バトミントン部を新しく作っただって。」

そしたらいつの間にかバスケットに入る生徒が減っちゃって、もう部とは言えなくなっちゃったんだって！」

「・・・そつかあ。残念だったよね？」

私は茜に問い掛ける。

「え・・・何が!？」

「何がって、茜張り切ってたじゃん！

高校では試合に勝ちたいって。」

私の言葉に茜は平然として言う。

「ああねー、でもさ、未来ちゃんがゆうように確かに先輩とかいない方が気兼ねなくできるし、勝つのも何も、まず自分が出てないとつまらなくて！！そう考えればむしろ好都合かなと。」

まったく茜はポジティブに物事を考えられてで羨ましい。

私だったら一気にテンションが下がってしまっただろ。

「って訳だから初心者の未来ちゃんでもオッケーオッケー！  
じゃ放課後にね」

そう言い残して茜はクラスに戻っていった。  
結局私は今回も断りきれなかった。

そろそろチャイムが鳴るからクラスに戻ろう、そんな時私の目に昨日見た長身で色黒、つり目の私の苦手なタイプのあの子が見えた。  
絡まれでもしたら大変だ、私はそそくさと足早に歩いた。  
すると彼女は1組のクラスの前で足を止め、誰かに話しをかけ始めた。

あつ！風間さんだ！昨日新入生代表の挨拶をした風間さん。  
これは・・・絡まれてるのかっ！？

お前調子こいてんじゃねーよ！！と。

あの顔で頭も良ければ嫉妬されても無理はない。  
どうしよう・・・止めるべき？

ああでもなんか威圧感あるよ・・・

えーい私は彼女より3つ年上だ！  
年下にびびってどーする私！  
いけっ！ケンカ売ってやれ！！

私は彼女達に近づく。

すると二人の会話が聞こえてきた。

「みもり、今日遅刻したでしょー！？」

「昨日DVD全巻みちって寝たの朝方で」

・・・なんだ、二人は友達か。

タイプ全然違うのに。

ともかく高校生活しゅっぱなから争い事にならず良かった。

私は昔から争いは好まない。下手に目立って目を付けられたくないし、クラスの中心人物になりたいなど一度も思った事はない。ただ無難、普通でいい。

私は今までの人生の中で身に染みている、女の世界は汚い。

必ず派閥は生まれ、何人か集まれば悪口が始まる、ついさっきまで仲良く話をしていた子のだ。

仲良しグループといったって自分が休んだ日には何を言われているかわかったもんじゃない。

つまり大勢でつるんでいたっていい事はないってもう十分に知っている。

大体トイレにだってあんな大人数で行ってどうするとゆうのだ・・・。

とにかくクラスでは波風立てない程度に周りと上手くやり、仲良しの女の子は2、3人いればよし。

それが今までの私の考え。

だが一限目で係決めをしている最中思ったのだ、そうして今までの自分を貫いては何も変わらない、三年前と何も変わらない高校生活を送るのではないかと。

新たな自分になりたいといつい先日まで思っていたのが、結局は人間そう簡単には変わらない、変われないのかもしれない。

「学級代表、誰かやらないか？」

担任の橋本先生の声が聞こえる。

あんな面倒な係、当然誰だって避けたい。全係の中で一番決めるまでに時間がかかる。

まあ稀に率先して手を挙げる人もいるけど少ないともこのクラスにはいないようだ。「誰もいないか？くじ引きかー!?」  
どうやらお馴染みのくじになりそうだ。

「あたしやつてもいいですよ？」

窓際の方から声がした。

声の主は風間さんの友達にして私の苦手 なタイプの少女、えっと・  
・・みもりって呼ばれてたっけ？

「おつと森川か・・・やってくれるのかあ・・・？」

心なしか先生の声に元気がない。

おそらくはこの外見、先生からしたら仮にもクラスの代表にするには不安なのだろう。

「じゃあ森川がやつてくれるなら、あと一人だな！学級代表は二人だからな！」

きつと今先生、心の中でもう一人の子は真面目そうな子にやって欲しいと思っっているだろうなあ。

そう思うと少し可笑しかった。

と同時に自分の心にも声なき声がかすめた。

“ やつてみたら私？今まで一度もなつた事ないし、今までの自分とは違う事をしたいでしょ？”

いやいや私はそんなタイプじゃないし！

直ぐさまその声を掻き消す。

それに皆の前で手を挙げるだけでも恥ずかしい・・・。

私は首から下げている羊のネックレスを触った。

妹の優香がこんな人の体になってまでウジウジする私をみたら呆れるだろうか・・・？



ああもう！今日の心の声うざっ！！  
やればいんでしょやればっ！！

「あのー私やります・・・」

私は小さく手を挙げか細い声を出した。

「おー音羽！よかった、やってくれるか！？」  
決まって良かった。

くじは面倒だからな」

クラスの間みな私が引き受けてくれてホッとした様子だ。

放課後、私はとつと家に帰ろうとした。慣れない生活で過ごす時間は疲れたし、今日は早起きで髪をセットしていたので余り寝ていない。

しかし廊下で茜が私を待っていた。

「あれ茜・・・、待ってたんだ！？」

「そうだよー、一緒に見学行く約束だったでしょ？」

できればこのまま帰りたい。茜は凄く感じのいい子だし、気さくで優しい、ただ唯一つ欠点があるとしたら自分の好きな事を人に強要させるけがある事かもしれない。

まるで全く興味の湧かない映画に無理矢理連れていかれるかのようだ。

正直気がすまない。でもここ数週間、茜は私にいつも優しくしてくれた。数十分くらいは付き合っただけあげべきだ。

「でさ、何処で活動してるの？」

体育館？」

私は尋ねた。

「いや体育館じゃなくて外だっさ。

中はバレー部がほぼ独占してるから」

ここ芦岡女子のバレー部は県内屈指の強豪だし、加えてこの体育館は狭いから同好会では使えないのも仕方ない。

そこはグラウンドの隅っこ、テニスコートの隣にある狭いスペース、小学生用並に低いリングが二つ並ぶ。しかも二つの間の幅は僅か10?程しかない。

これは余りにひど過ぎる！

まともな練習など出来るわけない。

私は茜の様子をちらっと伺った。

彼女もさすがにここまで酷い場所だとは思っていなかっただろう。

「誰もいないね・・・?」

さすがに茜も不安そうに呟いた。

私達は顔を見合わせ立ち往生してしまった。

「なにになに入部きぼう?!?!?」

テニスコートの方から声が聞こえる。

私達がそちらに目をやると女の人がかつちに向かってくる。

ポニーテールの恰幅の良い女性だ。

背は高く横幅もあり私はつい先生かと思った。

しかし女性が近づくとつれ彼女が若い事に気がついた。危なかった、危つく先生と呼んでしまうところだった。

「二人はバスケ同好会に興味あるの?」

女性が息切れをしながら尋ねる。

「はい・・・でも部員が見当たらず・・・」

茜が困ったように答える。

すると女性は

「マジで???うけるんだけど、ってかさ、あたし一応入ってるか

ら〜！」

と言いながら手をパンパン叩いて笑っている。

「えっ！？でも今テニスしてませんでしたか！？」

私は驚いてつい口を出した。

「ああね〜。まあこちら基本テキトーで、今日とかテニス部練習休みとかだとー、コート借りて遊んでるってわけ〜！

超やる気なくね？みたいな！」

ずいぶんとテンションの高いその女性に私達は呆氣にとられてしまった。

「ちよつと二人共引かないで〜！」

あたしこれでも三年で部長の渋沢玲奈ってゆうのね〜。

つか部じゃなくて同好会だから会長ってゆうのかな？

ふふっ、むしろ地位上がってね？みたいな。うけるわ〜」

・・・一人で盛り上がっている様子だ・・・。

「あつ私は東野茜っていいますっ、渋沢先輩っ、練習はいつしてるんですか？」

「・・・練習ねー、う〜んこちら顧問とかいないし〜三年が3人だけだし〜まあ受験生だし〜大会とか出る予定ないし〜まあたまに、気が向いたらたまに、週一くらいボール触るかな〜？ってそんなやつてないか〜」

適当過ぎるその言葉に私達は愕然とした。

言葉を失う私達をよそに渋沢先輩は続ける。

「とりあえず部じゃないから入部届けとか大丈夫だから〜！ここら辺適当に使ってオッケーだし。

うちらごくたまに姿見せるかもしれないけど、まあ基本現れないから〜。

友達誘って頑張って！」

先輩は言いたい事だけしゃべり、再び巨体を揺らしテニスコートへと戻って行ってしまった。

残された私達は再度顔を見合わせた。

茜が口を開く。

「とつとにかく入部したって事かな？」 「うっうん・・・、あっ・

・いや、私は入ってないけど。」

ごによごによ独り言のようにしゃべる私。

とは言えこの状況では入部も何もあつたもんじゃないが。

こんなへんぴな隅っこにぽつんととり残された私達、まったくもって  
先が思いやられる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1011t/>

---

ワンモアチャンス

2011年10月9日02時50分発行